



18
181P
5



門へ 13
番 1314
卷 2

相列
泉善
浦賀

鳩灌雜話 二

扇屋

○賣話島曰這話ハ東都の知己を文通る
至る則ち時專彼地の流行りて凡て其席
乃摸振成即座よ話と志す自と云這話を
山東京傳の易く行豪家の室其元吉原の
傾城ある友人の子成備を羨み漢草觀音へ
告子せし成即席よ制を志精選ありき
信ハ昂真文通の儘あり

新吉原麻屋の傾城本町魚人のみ煙る
下は傳出さきむしまくききとく
一子のちをあげき清景観る若子
せしは清景義成ふむのく海どま
みんしんとあり既し月みちてま
あまの産所の仕をそのついで
おまけつぎくれバツリヤ退付
むくアへん城走らせあつた
侍らぬとあくるまれくるい
あくるまれくるい

あくなき卯意氣あ大通の小林
けさのあり城丸るふあいさびの帷子
黒沼の紋付の羽織帯のついで
玉子髪の中田よゆひとて紙入
越川さげまの光琳の中巻よむ
るやの中着おしめ鳳點の
い秋月がぐるま何ひつあ
さめんざやのおちか残ちやんと
ぐるのうらほりまでとら
あくるまれくるい

さうあげぞうアも軒をほぶーぬを
是いと横手張うつあまの産ふまう
くくと玄実よ出表のうさ出切の
驚て表段よ中付牌がらうさうま
そのあ怪我させぬやう法き業れ
付くれは表段是いと法を志さむ
先法業え法事の方つむい
は表段あふやう親善の中子有親善
法業後あさうそあし法く

あさうさう親善の雷門へ遠入られ
親善い手も合さむすさふ矢大長門
馬原の方あゆむけは是いと
さういそあ但ー親善と法一解
は市の撞現一系後ろとあや
是いとさあめて田町の方
合点ゆり法後くと志さむ
あがり表原城さうてけ
坂色さう大門を遠入んと

乞いとあきれ何ぢか親と娘が大通を
しきり今日うまれし若娘ふうの巻
こそそいあるまじとわけをせりし
と娘とれごころますと夢を盡されし
おの大通のうまれありり意のてあ
きやア〜

○兵山人曰東都に於て願を解もの三つ
京傳が洒落馬谷が講釈竹邑の早美次

大

○這話の兩國へ人面大にせものよ出くら目
席に製を作者の嘉六といつ通人吉原細見
よ吾妻路都太夫とあるに

江戸本々屋人の屋敷に大く肉とり子仲
る猫のほきき〜白き牝大は女房同
様よ可きかり每晚ごらぬ様よ殺けるゆへ
け大にありしもて人面大を生るる大
乃面屋く肉は似し足手大のそ尾ハハ

一ありありめづる一ききよのあきばらふ
評判ある哉刃をせお牌よす付金百あり
買て兩國へ出せ見せられけし一くぬ
大あつと裁申る處く問が大金裁地る
事をもすあんでもよのめをししてうひり
あきりこんふよのめいあをるも犬を連
てきく人面大哉もすあせ五十兩よ賣
中をくといひし白犬を女房おまら又
ある仲るけし一裁申るれい處く問が

高似をしして白犬を女房あして人面犬
をうませぬ十あ小賣子とらすむわらつ
け時節よあんでも結搦あ金もあけあふ
あことそて是小場ゆいあまいとああぐく
白犬成連てきてそ又申分二十ぬあふ
臺中をくといひし女房おまら又外の
仲るけし一をす付十二あ二あても大
あいつく白犬を連てきて女房よすら
けし一を又外の仲るとも候くとあ

鳥
籠



九
段



みあてもよふこあでもよふこあでもよふこ
我もくくと白犬を吟味して女屠り
まらるやもやう屋敷中の仲間跡をす
犬ふのこわうては用書のるよあはれ
絶頂たふこゆり高職の家老つげす
中よけるふは家老げすをまきてたはよ
驚きまさてくあげわう〜たふゆあ日
本神國の不畜生國同共の不業こと
ふ屋敷の風義わうよあありてい屋の後

恥辱よもおお受よ迷停止中付一
と作らまらるがさの〜死罪流罪と中
やごあまらてもあ〜と替の中付う〜ふ
らあういふ〜と屋くと役人中い〜く
許養い〜すとい〜と屋傷の記録よ
とあ記仕をた湯家老やさる〜右の
や〜をさ〜い〜も替の中付う〜ふこあ
ま〜い〜でも觸れ〜あ〜やちさせるが〜い
と作らまらるれい湯を〜役人中付あ

鳥

二

ふてん成とせ浄家老伴られい
た〜〜〜
あはしの御伊豆とてなをなう〜

○山東京傳曰兩國一人面犬の足せとて
あつ時嘉六う這話成ちや〜とと
操いつ〜〜〜
てき〜〜〜
あ〜〜〜
ん〜〜〜

めと脊中波バヤク馬廬ら〜
あ〜こんや〜
○這席話右来〜
ち〜あ〜

お其話い

去嘉永の〜
せら〜
い何を〜
中麻〜

とひめておきくうあはせしうとくしげきき
い上も太舟が片を地うらあはれいひて
ごころうまひれれが真の夜を寐さる眼を
あはれくを寐るであらうあはれいでを寐るて
うらうらとやましうまを良うやまひ
るうまやあひそふあ真う夜を寐てきうあ
るまのうとやまひそれでもれうよとら
いれあひしうあひまひと足あらんか寝の
やいあひまあひしうあひしうあひしう

まあひしうあひしうあひしうあひしう
寮人かん真うよる寐やしうまあせんあ
私うまう月夜の晩うまの泉あ金の金
真をぬまひのよらうでもくくくく
あはれくあひまひそふしうアノ朝やとも
乃眼でしうまひびしうらうまやうあ眼
てごころうまひあはれがまうてあはれ
るものてとまあ良う埋屋あことふあ
寮人まあしうくあ首うあけああまあ



大う〜ソリヤ、罹る方が勝ぢやあつと作
ふ長を良せせり〜ソリヤ何でござら
まは〜サアふふお葉〜してんむづこらの
座のるれ掛およ捨〜るん〜と
い〜

○這話へ則先年久太良町の何某頓評
乃話成會せ〜時勝よ出〜と或人捕牙
道人の寓居吞秋庵よ来〜説者あり
這時和尚沈醉よ乘〜て昂真小此話よ

次で話を設〜と舌を捲て曰

さして長舌と長舌良うせり合は〜察人がさ
むれ〜成出への醫者が来わ〜りコリヤ長
舌を覚〜てヤ是の養伯老以出何や
きりい〜感心の様子ぢやわがどふ終〜
あわと尋ふ養伯イヤ只〜とありわりて
長舌と長舌良のせり合を取つ〜あり
まの取〜察人がお出あ〜とさ〜掛おの

層氣樓の画を拾う夏刀くく飛つといきり
いふささ志やと一紙始終くあせそ長那
色腹さくくをよるとおふ春伯老を拾う
夏刀くくとちりゆの實説てござるおとつゆよ
た縁てござるまの別博物志とち書物
ふ妻友のるとござりて二三月比よの海
邊よいゆのあつるでござりまのと妻友
乃即答小主人とのりが来くまの面白
そふあつる志やりのそ只そつら見てまい

ろふといふよ妻伯イヤく只そいふるの
砌申く二三月比てあけおつござりま
せぬといふを何さ正月よ初糺が出暑
氣見ふふよ累草紙しごま時節何はふ
夏申志や とうとらういしやう
いあまい冬拾の夏紙見らる景物語や
と妻伯を無埋ふいささい海邊とあつ
あんでそ西志やとまの安治川とさ
て出り九条あつりつり大が磯とさ

小例があらゆつさんでもあの砂つもの内
よ捨らるる刃もくぬるてあつと例と
とひりい向ふよハット氣がきりてあゆ
る近く立寄くよく刃もさふし
そのう構をてふさくしてさつとあつと
徑居まき果て屋振がふりさあつて屋の
うらきぬ梅う今越さうらと笑りて
あつ内よゴホリくと果ふむきさうさ
あ人コリヤぞあ志やとあされさつてハ漢の

捨ら構ををさよ見る日本よじんの捨るれが
を々げし丸刃るかとしやがてん合意してさ
のきとくさき砂法を張かきこけさ
きバ規貝が壹森を志てぬ

○己よ是浪華の即話捨観しやかんは悟し
當意即妙たういじくめう和尚わうしやうの例れいのたふさきりや
各感かくかん心しんさうらうらさく又さ決つぎを法ほふく
一ををさるがしして

さてあ人あじんけ件けんを刃じんく法ほふくくあつと

ひねの九条ゆへ捨のまのいさづの観のまをえん
しむ珠輪のまをえんまふあふは佳音
乃後志やとてともあふ眼をてふ面あふ
あいとまよると寺橋へ後で舞多村のた
うら佳音のほつ出まは折節波か平て
一面小例よあつてあふやうを教たよ
あふるといふ陸海橋山色下月よえつてあふ
色つぬけし死まんでもけ例のうら
ふこそ捨がまあふくあふであふと

あふ息を色はが例を法といゆけは
案よ遠よりはハット氣れまふ捨のま
本登のまあやとるちうくまあまれは
珊瑚の柱馬腦のうらむり璃理のうら
キヤコシの欄干綿のま帳まふ文目り
映らるまふさぬ珠よ國性爺のまをえ
波の色目鏡まふまを指まをいぬ
とんをれらうちまふまのやう織よ
地震がゆり出し珊瑚樹のまらら

ゆがむと瑤理の尾がうらうらとあり
かくり橋をうらうらとあり
懸て又砂川を渡りけりこれハ捨が
の志志して居る



○和尚の滑稽是當韓信が兵隊用るに
機変益奇うして益妙あり

鳩灌雜話二 終

